

11. 沖縄県現地調査実習

石川 達葵

1. はじめに

京都府立大学文学部歴史学科地理学研究室では毎年沖縄県で任意の自治体を選択したうえで、当該自治体の現地調査をすることを慣行としている。「建築史学実習」「建築史学演習」「地理学実習」「地理学演習」の那覇市内寺社巡検と建築史学・考古学等のゼミ・有志とも合同で、今帰仁城・今泊地区・首里城の史跡整備に関する現地見学も合わせておこなった。

2. 今年度の調査概要

調査概要は以下の通りである。

調査日 令和6年6月23～25日

調査員 井上直樹、上杉和央、岸泰子、菱田哲郎（以上教員）、登谷伸宏（京都工芸繊維大学教員）、向井佑介（京都大学教員）、王一冰、大倉響稀、花尻千秋、松岡茉陽琉、山内愛弓、横白彩江（以上博士前期課程）、石川達葵、橋本唯、廣野勝、藤田尚希、山下悠衣奏（以上4回生）、岩井天、岡橋莉奈、崎浜七夏、樋上千翔（以上3回生）

調査内容 6月23日（日）

午前 北谷町慰霊碑調査

午後 勝連城・中城城・中村家住宅見学

6月24日（月）

午前 宜野湾市嘉数慰霊碑調査（写真1）

午後 今帰仁城・今泊地区見学

6月25日（火）

午前 【学部生】株式会社国建事前講話

【院生】那覇市内寺社巡検

13:00 【学部生】首里杜^{すいむい}地区見学

【院生】那覇市内寺社巡検

14:30 【共通】首里城見学

17:30 【共通】情報交換会

今年度の調査のうち慰霊碑調査では、北谷町と宜野湾市の慰霊碑を対象とした。調査の実施にあたっては、学生の参加者15人を3班に分け、数がおおよそ均等になるように調査担当の慰霊碑を各班に配当した。



写真1 嘉数慰霊碑調査の様子



写真2 今帰仁城の石垣

3. 今帰仁城・今泊地区・首里城現地見学内容

以下では、今帰仁城・今泊地区・首里城現地見学の内容を文化遺産の保存・活用の面からまとめる。

(1) 今帰仁城

今帰仁城は沖縄本島北部本部半島に位置する。1972年（昭和47）5月15日に国指定史跡となり、2000（平成12年）12月2日には世界文化遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の構成資産と1つとして登録された。グスク周辺には4か所の駐車場とバス専用駐車場や、グスク交流センター、歴史文化センターなどのガイダンス施設や博物館も整備されている。

外郭と内郭の境界には高さ約7mの石垣が築かれている（写真2）。台風などで石垣が崩壊することもありたびたびある。石垣の三次元計測をすでにおこなっており、崩壊するたびに可能な限り元の状態に戻しているそうだ。城郭内部に進むと、戦前に整備された直線的な石段と曲がりくねった元の道の2種類の道があった。右手にある元の道は日々崩れていき、十分な案内表示もなかった。

今帰仁城は防衛施設であると同時に聖地という側面がある。今帰仁城外郭にはレコーラウーニと呼ばれる祭祀空間があり、現在でも祭祀の際には使用されているという。城内には2つの御嶽のウベ（最も聖なる場所）があり、現在でも祭祀の対象となっており、信仰に関わる入場者については城内への入場料が割引かれるそうだ。単なる史跡ではなく現在進行形で利用されている聖地という顔も持っているのが他の史跡とは異なる特徴だと感じた。

主郭には発掘調査に際し判明した層序図が垂直に表示され、グスク成立以前から現代に至るまでの今帰仁城の歴史の痕跡が視覚的に伝えられている（写真3）。中央部には、今帰仁城の歴史を4期に分類して示した案内板があり（写真4）、当時の主郭の様子を推定したイラストや出土品の写真を交えながら、時期ごとにわかりやすく伝えるものになっている。垂直に層序図を表示する手法は他ではあまり見たことがなく、珍しい整備方法だと感じた。

(2) 今泊地区

今帰仁村字今泊は、今帰仁城の麓にある集落で、フクギ並木の屋敷林や湾曲した道路線形など、近世琉球における風水地理にもとづいた景観を色濃く残している。2019年（令和元）10月16日には国の重要文化的景観「今帰仁村今泊のフクギ屋敷林と集落景観」として選定された。



写真3 今帰仁城主郭層序図



写真4 今帰仁城主郭案内板

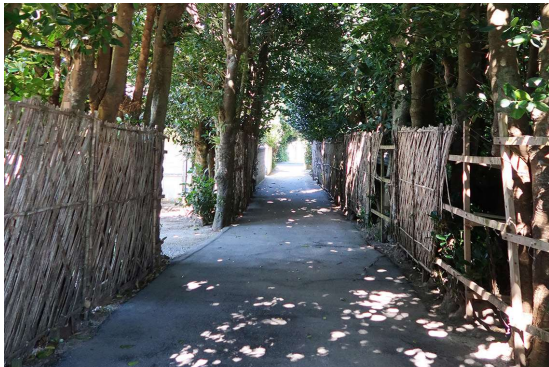


写真5 今泊地区のフクギ並木

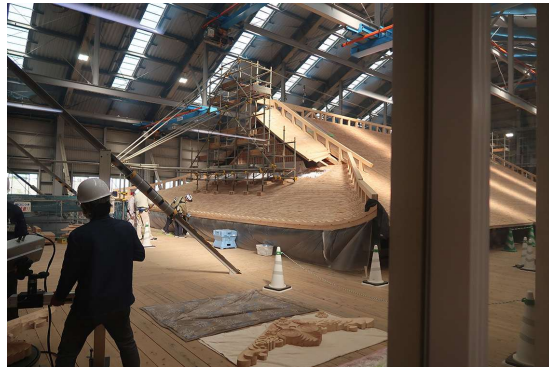


写真6 首里城正殿復興工事の様子

かつては沖縄県各地にみられたフクギ並木は、建物の建て替えなどの開発に伴って数を減らしているが、今泊地区にはまとまって残っている（写真5）。集落内には旧親泊ムラのフプハサギと旧今帰仁ムラのハサギンクワの2つの神ハサギという祭祀空間があり、集落の景観とは切っても切れない関係にある。集落内には屈曲を伴った格子状に広がった道路、赤瓦木造屋根の伝統的家屋、屋敷抱護や防潮・防風を目的に植えられたフクギなどが組み合わさった景観が広がっている。これらの景観を守るために、国と今帰仁村の補助金を組み合わせてフクギを植える取り組みもおこなわれている。今泊地区では過度な案内板などは整備せず、集落内への車両乗り入れを制限するなど地域の生活や文化を守る形での保存活用が模索されている。

（3）首里・首里城

首里城見学に先立ち、首里城周辺の首里杜地区も案内して頂いた。首里城の復興工事を契機として、周辺の首里杜地区も含めたまちづくりが計画されている。首里杜地区も合わせて復興前より魅力的な首里城となって欲しい。

首里城は、1972年（昭和47）5月15日に国指定史跡となり、2000年（平成12）12月2日には世界文化遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の構成資産の1つとして登録された。現在、2019年（令和元）10月31日の火災からの復興工事が進められている。見学時には、2026年度（令和8年度）の完成を目指した正殿の修理が進められていた。すでに柱が建てられ、屋根が取り付けられていた（写真6）。復興工事は素屋根の内部にも見学スペースが設けられ目の前で工事の様子を観察できたり、ディスプレイでこれまでの復興の流れを解説する映像を放映したりするなど、「見せる復興」を意識して進められていた。

4. おわりに

以上、今帰仁城・今泊地区・首里城での現地見学の内容を、史跡整備の面から簡潔にまとめた。どの場所でも大切にされていたのは聖地や街路、住居など現地に住む人々が大切に守ってきたものを尊重し、それを活かす形で整備を進めるという、住民本位の史跡整備のあり方だった。史跡の価値を未来に伝えていくためには、専門家だけではなく、当該地域に住む住民の理解は欠かせず、そのためには住民とともに史跡整備を進める必要があると改めて感じた。なお、北谷町と宜野湾市における慰霊碑調査については別途報告書にて詳しく報告する。

謝辞

本調査の実施に際し、今帰仁村歴史文化センター長玉城靖様、琉球大学名誉教授高良倉吉様、株式会社国健平良啓様・山城一斗様・木下能里子様・佐久本りの様には大変お世話になりました。末筆ながら感謝申し上げます。

参考文献

首里城公園（<https://oki-park.jp/shurijo/>）（2024年7月14日最終閲覧）

世界遺産 今帰仁城跡（公式サイト）（<https://www.nakijinjoseki-osi.jp/>）（2024年7月13日最終閲覧）

今帰仁村教育委員会（編）2023『重要文化的景観「今帰仁今泊のフクギ屋敷林と集落景観」整備計画書』

編集後記

余裕をもって仕事に取り組みたい。一つ仕事が終わる度に今度こそはと思うが、今回も果たせなかった。文字通りバタバタ。年末から長い師走が続いている。一つの救いは、春からのフィールドワークに始まり、冬の集報に終わるこの一連の営みが、10号を越え、府大歴史学科の伝統として根付きつつあること。フィールドをご提供いただいた関係各所のご厚意に深く感謝申し上げたい。

なお本書の組版作業は、歴史学科文化遺産学コースの合同実習メニューとして学部生がAdobe社のInDesignを利用しておこなっているが、もちろんそのままでは本にはならない。一書にまとめるにあたって力を尽くしてくれた大学院生の頑張りにも深く感謝したい。(い)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第11号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5

発行日 2025年3月31日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38-2
